

財務次官が問う政官のひずみ 黙る霞が関、憂える元上司 加藤晶也

2021/11/15 5:00 | 日本経済新聞 電子版



「財務次官、モノ申す」と題して現状の政策論争を「バラマキ」と断じた矢野康治次官の月刊誌「文芸春秋」の寄稿には、財政のあり方以外にも見過ごせない論点がある。政官関係はどうあるべきかという問題だ。

「『心あるモノ言う犬』であらねばと思っています」「黙してただ服従するのは（中略）血税ドロボウだと思います」。矢野氏は論文で国家公務員の役割について持論を展開した。摩擦を恐れて口をつぐむ今の霞が関を喝破したとも取れる表現だ。

もともと矢野氏は時の政権幹部にも臆せず財政規律の重要性を説く「モノ言う官僚」として知られる。今回も言い回しに過激な部分はあるものの財務省内では「矢野氏の元来の主張だ」との受け止めが多い。

なぜ雑誌への寄稿という形であえて主張を公表したのか。「問題の本質はそこにある」と指摘するのは厚生労働省OBの香取照幸・上智大教授だ。民主党政権下の内閣官房で矢野氏とともに消費増税を含む「社会保障と税の一体改革」の実現に汗をかいた元上司でもある。やはりモノ言う官僚として知られた。

香取氏は矢野氏の異議申し立ての底流に近年の政官の関係の変化があるとみる。2009年からの民主党政権では政治主導の名の下に官僚外しともいえる状態が続いた。12年からの第2次安倍晋三政権以降は首相や官房長官に近い一部の官邸官僚が権勢を振るった。菅義偉前首相は官房長官時代から人事権をちらつかせながら霞が関を掌握する手法を取った。

「官僚がモノを言えない状況が続いてきた。結果として人事がゆがみ、疑問に思うような幹部が何人も生まれた」と香取氏は分析する。



厚労官僚だった香取照幸・上智大教授は霞が関の人事のゆがみを指摘する

政官の関係はどうあるべきか。「物事を決める責任があるのは政治家だが『自分が思うからこうする』というだけではいけない。プロ集団である役人の言うことを聞く耳も持つことが重要だ」と語る。「選挙がない役人が耳の痛い正論を言う役割分担もあっていい」とも指摘する。

「（財務省は）負け癖がついてしまっている」。矢野氏は論文の公表前、周囲にこう語っていた。「やむにやまれぬ大和魂」と記した論考は財政の行く末だけではなく、モノ言わぬ霞が関に対する危機感を政官界にとどまらず幅広く問題提起する意図があったようにも見える。

矢野氏と香取氏にはもう一つの接点がある。民主党政権で一体改革の担当相だった与謝野馨氏に仕えたことだ。その与謝野氏は08年に自著で政官関係のあり方について説いた。



官房長官や財務相を歴任した故・与謝野馨氏は「役人がいない国家はありえない」と説いた

「役人がいない国家はありえないわけで、そういう人たちをくじけさせるということがいかにマイナスか、（国会議員は）もっと理解するべきだ」「役人は少し褒め、少しおだてて方向性を与え、あとは政治家が責任を取る。そうすれば役人はいくらでも知恵を出すし、いくらでも働く」

官僚が言うべきことを言うには、受け止める政治家の度量も問われる。矢野氏の論文には「大変失礼な言い方だ」（自民党の高市早苗政調会長）と与党幹部らが反発した。「役人ののりをこえている」と更迭を求める意見もある。

岸田文雄首相は今月の文芸春秋のインタビューで「最後に結論が出たら従ってもらえると、私は信じております」と述べた。矢野氏の処分は「全く考えていない」と強調した。

普段は多弁な矢野氏は論文の公表後、多くを語っていない。調整が大詰めを迎える経済対策がバラマキにならないか問うとポツリと答えた。「賢明な政治判断がなされる」

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。